

狐狩 : 回顧

| | |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------|
| 著者 | 飯田, 御世吉郎 |
| 雑誌名 | 龍南會雜誌 |
| 巻 | 137 |
| ページ | 132 - 136 |
| 発行年 | 1910-11-26 |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/6101 |

の事に候へば人心の變移尤もの事と存候實に其頃の小生等はかゝる大義名分の問題が一番興味を感じ居申候爲些細な事にも腕まくりして議論を始め其都度先生方に不鮮御厄介をかけ候事今更汗顔の至り其酬ひにても候べく小生は思ひもかけぬ『先生』に打なり今度は反對に甘々小豪傑諸君にイビリ廻はされ居申候夫れは兎に角當時は實にこんな他愛もなき事に力瘤を入れて騒ぎ居つたせいも今の若い諸君に比して何れも人間が鷹揚であつたかと存候これに比ぶれば二点二点の点数も仇には見す少しでも良く卒業して他日の就職難を軽くして置かねばならぬ杯の近日の學生諸君は御氣の毒見た様に被存候何でも世の中は日進月歩に相違なければ書生する身から申せば明治以後なら一年も前の方がよかつた様に存候は矢張婆様の昔最負と申すべきや小生の經驗にては只今迄の生活中第五に在學して居つた時代程上下左右に隔意のない明け放しの爽快な生活は無之候其頃の人に出席へば先生たりしと生徒たりしとを問はず何となく多少血脈でも續いて居る者と會する様な感が致候昔思ひ出しつゝ無駄話が長く相成申候餘り懷敷ので思はず無遠慮に申上候御採録の餘地も御座候はば御掲げ被下度本懷此事に御座候拜具

狐

狩

第五回雜誌部委員

飯田 御世 吉郎

僕が學んだ熊本の第五高等學校は、龍田山といふ岡の麓にある。可度また近邊に白川といふ流があるので、何かといへば此山と河は、何時も引合に出されたが随分難有迷惑もしたらうか、又か／＼と小うるさと思ふこともあつたらう。演説にでも、雜誌にでも、祝詞、祭文にでも、乃至は學校の作文にでも、或は「龍山白水」

とか「龍田山の麓、白川の畔」だとか、丁度、日本の山水秀靈を稱ふる場合に、何時も富士山と琵琶湖を引に出すと同一筆法で、よく一同が引張出したものであつた。山川に靈かないからこそ仕合で、苦情も小言出ぬか、もしかあつたが最後、佛の顔も三度度といふから、いかな人好の龍田山、白川でも萬更黙つてばりはゐるまい。孰れ「五月蠅ね」とか「無斷拜借は御免だよ」とかいつたに相違ない。

龍南會といふ校友會の名稱も、實は龍田山に因つてつけたのだが、樹林鬱蒼たる一帶の丘陵を負ふといふ置に學校があり、又校地の四圍か松林だから、よく狐がどうしたの、狐を見たの、折々噂に上つた事もあつた。冬の霜夜などは、寄宿に居るとよくクワン／＼の聲か聞けたもんだ。

十一月の末頃だつたと記憶する、何でも屋外運動場の芝草が黄んでゐたやうであつた。ドンヨリと曇つた氣の日曜の午後三時頃であつたらう、寄宿生が大勢出でベースや、投球をやつて餘念なく遊んで居つた所誰が見附けたともなく、「狐だ／＼」といふ聲が、甲から乙へ、乙から丙へと口移しに傳はつた、と思ふどしる氣早な連中だから耐らない、「やつ附けろ」と罵り騒ぐ。校庭と運動場との境目には木柵があつて、三ばかりの勾配が付いて、運動場の地面が一段下つてゐる其段をなしてゐる側面に、雨水を吐く土管の口が開いてゐた。其土管に狐か這入つたといふので、小松の梢をへし折つて來て、松葉をブス／＼と燻べ立て、二を頬に管の中に煽りこんだ。其上テニス用のネットを持って來て、そこに張つた。數十人の壯俊はベースのネットだの、擊劍の竹刀だの、棒切だの、各自に得物々々を携へ、或は上段に振構へてるものもあれば、或青眼に構へてるものもあり、向八巻をしてゐるものもあれば、腕まくりをして力んでゐるものもあり、居合腰して頭張つてるものもあり、尻端折つて意氣込んでゐるものもあり、孰れも「曲物ごさんなれ」といはんばか

十撃の下に撲り殺してやらん勢毒じや、手ぐすね引いて待ち構へて居つた。其仰々しきたらなかつた。か
 く蟻の這出づる隙間もない程嚴重に包圍されては、いかな神變不可思議な魔術ある化性の野干でも、連も逃
 れつこはない。松葉はいよ／＼燻ふる。煙は雲をなして巻き昇る。罵る聲は一生高まる。「やつ出たぞ」を
 ぶ聲諸共、バタリ、ボタリ、ボカ／＼、ガチ／＼竹刀、バツト、棒切か一切に亂下する。赭い腕が舞ふ。四
 い毛脛が躍る。「やつ付けた／＼」、「狐が取れたぞ／＼」と口々に罵る。ウア／＼の勝鬨の聲。流石に後よ
 ／＼と渦巻き來る青松葉の煙に燻べ立てられて咽せかへり遂々耐らずに、土管から出掛つた所を、丁度殺
 れて了つたのだ。見れば大きな古狐である。齒を喰ひしぱり、舌を噛み出し、血を吐きながら大地に横つ
 居る。周圍は零時人の山が築かれた。舍内に残つてゐた連中まで聞付けて悉皆觀に來たのである。兎に角
 の仰山な狐狩も、獲物が手に入つて見れば、先は一落段を告げた譯。所が「何處にか、何だか鳴くやうな
 な聲がするせ」と誰かが叫ぶ。皆が耳を欽つると、成程近邊に何だかクン／＼いふやうな鳴聲が聞れる。「
 テな狐の子ぢやあるまいか」と一人が切出す。「そうたらう」と他の一人が合槌を打つ。末には「そう／＼」、
 皆が調子を合する。鳴聲のする方向を聴き澄すと愈地下の土管の中に相違ないと議一決する。土管の口か、
 測量して、大抵此邊と思ふ場所を掘り起す。遂々一個の土管を掘出す。すると其中から鼠位の大きさの狐の
 が五匹、ウヨ／＼轉げ出る。毛は茶色だが、形は狗の子とそんなに違はない。妙な聲で鳴ながら、頻に母
 を探すやうな模様だから、襟頸の所を撮んで親狐の傍に持てよやる。すると五匹の子が、我をがちにその
 房に喰いついてチウ／＼吸ふ。現在殺されて死んでゐる母親を、それとも知らず嬉しそうに餘念なく乳房
 啣む五匹の小さい子狐の様を觀ては、流石の豪傑連も感動せずには居られない。此悲劇を眼の當りで見ては

何だが一種罪惡を犯したやうな惨い事をしたといふ心地が胸を襲ふた。一同は零時水を打つたやうに静ま返つた。

今迄は何の事はない、唯もう夢中になつて騒いでゐたのだが、こうなつて見ると一同の氣も落つき心も靜つて、さて此親子の狐の始末をどうするかといふ問題に差當つたのである。兎狩にでも往つて狐をせしめのなら何の事はない、舌鼓打鳴して狐汁の五六椀は時の間に平けて平氣な連中だか、其目のは誰一人、健會の好下物にやうと發議する者もない。遂に親狐は商買人に賣つて其代價で五匹の子を捨て養育しやうといふ事に善後策が定た。正直に其際の一同の心中を白狀すると、實は内々執念深い野千の事だからといふ薄味惡さもあつたし、無慘な事をしたといふ後悔の念も多少は萌したし、第一孤兒となつた五匹の子に對し氣の毒といふ憐愍の情も手傳つた譯で、惡戯者に不似合なこんな殊勝な菩提心を發した次第であつた。それから寄宿舎の一室に、狐の孤兒院が設立されて、義捐金募集の始まるやら、孤兒養育掛が出来るやらそれ、頓だ騒ぎで、毎日暇さへあれば子狐を抱いたり、玩弄物にしたり、牛乳を飲ましてやつたりして、一で楽しんでゐた。氏素生は争へないもので、始は顔が狗兒のやうに可愛らしかつたが、日が経つにつれて口邊が段々尖つて何となく貌相が狡獪く、小悪くらしくなつて來た。此分では將來は、馬の糞の饅頭で以て育の報恩位やり兼ねまいと思はれたのである。

聽て寒中休暇が來たので留守中養育の事は、舎の小使に委細依頼して一同歸省し、二週間の間に大分生長たろうと、内々それを樂みにして歸舎して見ると、こはそも如何に五匹が五匹ながら悉皆死んで了うたの事で、痛く失望したが追付かない。五つの小さい屍を埋めた校庭の一隅に一同で「五狐之墓」と書きつけ

木の墓標を建てよやつた。

後で聞くと、何でも小使奴が狐に宛がう筈の牛乳を自分達で飲んで了つて、餓殺したのだといふ話で、痛憤慨した連中もあつた。

其時分に教師をしてゐられた彼の有名な小泉八雲先生を訪ふた時、「君方が狐を退治したといふがいつぞや学校の傍で郵便配達夫を魅したといのは其奴だつたらう」といつて笑はれたが、先生も實は孤兒院に一兩何といふ義捐金を惠まれた慈善家の一人であつた。

チヨト忘れてゐたが、土管一個の破損料として大枚五十錢といふ大金を學校から徴收されたのである。

補 充 時 代

江 楠 五 生

余が補充時代に實は二十年前である。二十年と云へば丁度一世紀の五分の一で所謂ふた昔である。維新前いさ知らず、日進月歩の今日に於ては、二十年と云へば誠に隔世の感がする。其頃は本科の外に豫科が一、二、三級、豫科補充科が一、二級有つてまづ中學校の格であつた。併し入學試験は減法に難かしくて、英の譯解や書取など殊に準備を要した。其爲めに當時余田司馬人氏の經營して居られた有進校といふ豫備學は非常な繁昌であつた。自分は濟々齋の二年生から入學試験に應じたが、一級には通らずに最下級の補充二級に通つた。大方百名許りの受験者中、一級に許された者は僅かに二名で、即ち四年前までこの教授して居られた高木敏雄君と、熊本地方裁判所檢事で在職中死なれた飯盛歡太郎君とであつた。受験場は瑞